

平成28年1月21日

事業経過報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

都道府県教育委員会等名 岩手県
 所在地 岩手県盛岡市内丸10-1
 代表者職氏名 知事 達増 拓也

平成27年度英語教育強化地域拠点事業における事業経過報告書を提出します。

1. 事業の実施期間

委託を受けた日 ～ 平成28年3月31日

2. 強化地域拠点の学校名 (学校数が多い場合は欄を追加すること)

ふりがな	いわてけんりつしわそうごうこうとうがっこう	ふりがな	たなか こうのすけ
学校名	岩手県立紫波総合高等学校	校長名	田中 耕之助
ふりがな	しわちょうりつしわだいいちちゅうがっこう	ふりがな	たぐち しゅういち
学校名	紫波町立紫波第一中学校	校長名	田口 秀一
ふりがな	しわちょうりつひづめしょうがっこう	ふりがな	いわいずみ こうき
学校名	紫波町立日詰小学校	校長名	岩泉 康喜
ふりがな	しわちょうりつあかいししょうがっこう	ふりがな	こんの よしひろ
学校名	紫波町立赤石小学校	校長名	紺野 好弘
ふりがな	しわちょうりつふるだてしょうがっこう	ふりがな	あさぬま きんのすけ
学校名	紫波町立古館小学校	校長名	浅沼 金之助

3. 研究内容

(1) 研究開発課題

小・中・高等学校を通じた英語教育の抜本的充実に向け、小学校英語教育の先進的な取組について試行し、その成果と課題を検証するとともに、小学校英語教育を踏まえた中学校、高等学校における教育課程及び指導方法を開発する。

(2) 研究の概要

この研究は、小・中・高等学校の各学校段階における目標設定や指導内容、指導方法について、各校種の教員が協力して開発し実践することを通して、児童生徒の英語によるコミュニケーションへの関心・意欲及び英語運用能力の向上を目指し、以下の研究内容に取り組む。

- ① 小学校高学年「英語科」のカリキュラム開発を通じて、文字の扱いや文構造への気付きを促す効果的な指導について検討するとともに、児童の表現意欲を喚起するオリジナル単元を開発する。
- ② 小学校高学年「英語科」の評価について、CAN-DO に対応した評価項目を設定して実施するとともに、評価の記録方法についても適切な方法を検討する。
- ③ 小学校教員を対象とした教科「英語」指導の研修カリキュラムの作成と実施を通して、小学校担任が教科「英語」を指導する際に身に付けておくべき資質について検討する。
- ④ 中学校及び高等学校における小学校外国語活動を活かした指導の在り方について、小学校での体験を引き出す指導の工夫や、小学校の教材、活動、語彙や表現、言語使用場面等とリンクした指導実践を展開する。
- ④ 以上の実践を通して、平成 26 年度に作成した小中高の一貫した到達目標を見直すとともに、到達目標に対応する指導内容の改善を行う。

(3) 現状の分析と仮説等

①現状の分析と研究の目的

本地域は、平成 26 年度に英語教育強化地域拠点事業の研究指定を受け、次のア～オの内容について実践研究を行った。（研究内容については、研究計画の第 1 年次の取組内容を参照）

- ア 小学校中学年における「活動型」の実践
 - イ 小学校高学年における「教科型」の実施に向けた目標及び指導内容の検討
 - ウ 小学校高学年における文字の扱いの工夫
 - エ 小学校高学年における「教科型」の年間指導計画及び教材の準備等
 - オ 中学校及び高等学校における指導の充実
- これらの取組から、研究の主な課題としてあげられるのが、次の 4 点である。

<小学校高学年の教科「英語」における指導内容・指導方法等について>

- 小学校高学年の教科「英語」で使用する教材は、文部科学省の教材を利用しつつ、児童の実態や興味・関心等に応じて、教員が教材を開発する力を育てていく必要がある。他教科との関連を活かした単元や、地域の題材を扱うオリジナル単元を工夫していく必要がある。
- 小学校外国語の教科化に向けて、特に「書くこと」の指導を行う際に、子供たちの意欲の低下が懸念される。「書くこと」に対する興味関心を高めた上での指導のあり方について、今後も検討が必要である。

平成 26 年度の実践から、小学校高学年におけるアルファベットのなぞり書きや、簡単な単語の視写について、子供達からは肯定的な意見が多く聞かれた。一方で、取組が困難な児童も見受けられたことから、発達段階や児童の実態に応じた指導について検討が必要である。

また、音と綴りの関係の指導（中学校英語担当教員による試行的実践）については、興味を持って取り組む児童も多かった反面、これを小学校において指導の中心として継続的に指導することには相当の困難が予想された。児童にとって、また指導する教員にとって、過度の負担とならない取り扱い方について、工夫が必要である。

<小学校高学年の教科「英語」における評価方法について>

- 小学校高学年の教科としての評価をどのように進めるか、更なる検討が必要である。目標と対応した評価である必要がある一方、数値に頼らずに、児童が自分の伸びを実感でき、学習意欲を高めるような評価を、試行しながら工夫する必要がある。

- 評価方法としても、観察による評価だけでなく、中学・高校で実施しているようなパフォーマンス評価を一部取り入れて行うよう、計画実施する必要がある。

<小学校教員の指導体制及び指導力向上に向けた教員研修について>

- 本県の研究においては、小学校において学級担任が中心となって指導することを前提としている。この場合、教科化した内容を指導するために、担任が身に付けておくべき指導力をどのようにとらえるべきか、更に検討が必要である。
 特にも、綴りと音の関係、英語の文構造（語順等）への気付きを児童に促すためには、指導者自身にその基礎知識が必要であることから、H27年度の文部科学省の補助教材の活用と併せて、指定校の教員を対象に研修を行う必要がある。
- また、英語専科で指導を行っている学校は、現在、県内の公立小学校にはない。今後、専科教員や中学校教員の小学校兼任などの指導体制を導入する場合、どのような課題があるのかについても、情報収集と検討が必要である。

<小学校の指導を活かした中学校・高等学校における指導の充実について>

- 小学校における取組が進む一方で、中学校及び高等学校においては、指導改善が十分に進んでいない。

中学校については、小学校の指導を受け、その成果を中学校の学習につなぐためのイメージを共有する段階にとどまっている。特に、小学校で身に付けた「素地」を中学校でどう引き出すかが鍵と考える。定着した知識・技能としてとらえるのではなく、外国語を通して活動した体験そのものを、中学校の学習にうまくつなげる指導について検討し、実践を勧める必要がある。また、言語材料や言語活動の内容などに関する小中接続もさることながら、小学校で「相手に伝えたい」「分かってほしい」という思いを大切に育てる指導を行っているのに対し、中学や高校で技能習得に指導が偏りがちな点についても、改善していく必要がある。

高校について、指定校の英語力は調査結果からも厳しい状況にあり、英語科指導の課題は、生徒の学習意欲を向上させながら、生涯にわたって英語と向き合い学び続けることができる生徒を育成することととらえている。その点で、小学校及び中学校の授業を多く参観し、小中学校における英語（外国語活動）の授業づくりや指導法を学んだことは、大きな成果であった。今後、小中学校の英語教育を高等学校の英語科指導にどのように活かしていくか検討していきたい。

以上のことから、この研究は、小学校と中学校、さらに高等学校も含めた各学校段階における目標設定や指導内容、指導方法について、以下のア～エの内容を各校種の教員が協力して開発し実践することを通して、児童生徒の英語によるコミュニケーションへの関心・意欲及び英語運用能力の向上を目指すことを目的とする。

- ア 小学校高学年の教科「英語」における指導内容・指導方法等
- イ 小学校高学年の教科「英語」における評価方法
- ウ 小学校教員の指導体制及び指導力向上に向けた教員研修
- エ 小学校の指導を活かした中学校・高等学校における指導の充実

②研究仮説

上記の研究課題を解決するために、平成27年度は以下の内容に取り組むこととする。

ア 教育課程の編成について

- ・小学校第3学年及び第4学年において、現行の小学校外国語活動のねらいや内容を踏まえた授業を週1コマ実施する。（総合的な学習の時間を削減）
- ・小学校第5学年及び第6学年において、教科として英語の授業を週1コマ実施する。（外国語活動の時間を充てる）

イ 小学校高学年「英語科」のカリキュラム開発及び指導の工夫

小学校高学年の英語科においては、文部科学省の提供する補助教材を活用した文字の取扱いや文構造への気付きを促す指導を取り入れながらも、最終的には「コミュニケーション」をゴールにした単元づくりを行っていく必要がある。現在使用している「Hi, friends!」等の内容と CAN-DO で示した英語を通して育てたい力を基に、単元を構想し、実践する。

また、児童のコミュニケーションへの意欲を引き出し、いかすために、他教科・領域と関連した題材や紫波町発信のオリジナル単元づくりにも取り組む。

これらの授業においては、児童の興味・関心を基にしてコミュニケーションの活動につながる大切だが、扱う言語材料を増やさず限られた表現で、児童の思いをのせられる内容にしていくことが求められる。そして、「伝えられてうれしい・・・けど、もっと詳しく伝えたい」という思いを中学校に引き継ぐために、5・6年生にそれぞれ1～2のオリジナル単元を開発する。

ウ 小学校高学年「英語科」の評価方法の工夫

小学校で教科化される英語の評価については、児童の「できる感」を育てる、前向きになれる評価を行うことが大切であると考えられる。

評価項目は、CAN-DO に対応した内容から設定し、すべての児童が「できた」と自信が持てるように評価を行う。その際、知識や技能をコミュニケーション場面で評価することが大切であり、場面と切り離して表現のみ取り出して理解できるかといった形の評価はなじまない。例えば、ALTと一対一でコミュニケーションを行うパフォーマンス評価場面を設けるなど、児童の達成感につながるような評価にすることが大切である。

また、評価の記録方法についても、文章表現による記載を軸としながらも、教員に過度の負担とならない方法について検討し、開発していく。

エ 小学校教員を対象とした教科「英語」指導の研修実施

新たに教科として実施する小学校英語の指導を学級担任が中心となって行う際、小学校の教員に英語の「文字と音」や「語順・文構造」に関する研修が必要となる。

ただし、フォニックスや語順指導を小学校の児童に行う（ルールとして演繹的に）のではなく、文字と音の関係や文構造への気付きにつながるような言語体験を繰り返し与えることで、中学校で子供がルールを発見し、帰納的に理解できるような基礎をつくることを目的とした指導が大切である。

また、実際の指導にあたっては、アルファベットの認識を育てることが、中学校の指導につながる。小文字は大文字よりたっぷり時間をかけて繰り返し行い、1文字ずつができたなら、複数の文字を同時に認識できるようにするなど、単語の認識へとつなげる指導について、小学校教員に研修を通して理解させる。

オ 中学校における小学校外国語活動を活かした指導の工夫

本研究の成否を握る鍵は、小学校外国語活動の体験で得た学びをいかに引き出し、中学校の指導につなげるかにあると考えられる。

中学校では、小学校で学んだことを、定着した知識や技能としてとらえず、「同じようなことをやった」「聞き覚えがある」のような体験を引き出すことが肝要であり、小学校で慣れ親しんだ音や表現から、「文字と音」や「文構造」への気付きを促す指導が重要である。

また、小学校同様に、「英語を使う必然性」（聞きたくなる、伝えたくなる）を大切にしたい指導を行うとともに、小学校の教材、活動、語彙や表現、言語使用場面を中学校のものとしてリンクさせる工夫も、小学校で培った「素地」を引き出し、活かす指導となる。

(5) 研究計画 ※平成27年度新規採択件については、第一年次から第三年次まで記載すること。

校種・年次	取組内容
小学校 第一年次 (H26)	<p>【主な研究内容】 (◎重点)</p> <p>◎小学校3～4年における「活動型」の実践 「総合的な学習の時間」を35時間削減し、「外国語活動」に充てた。教材は、「Hi, friends! 1」を中心に、各学校で年間指導計画及び単位時間の略案を作成した。実際の実践を通して、発達段階にそぐわない内容や、分量と時数の関係などから、語彙を精選したり、繰り返し学習する機会を多くしたりするなどの検討を加える必要があった。そこで、Hi, friends! について、3・4年生それぞれで指導する際の計画案を作成した。 また、言語材料が多くなりがちな単元の表現を精選したり、小学校中学年を対象とした指導ではねらいに到達するのが難しい場合は単元ごと精選したりする必要があった。</p> <p>◎「活動型」を踏まえた「教科型」の実施に向けた目標及び指導内容の検討 目標及び指導内容について検討を重ね、小中高を見通した目標を設定した。また、CAN-DO リストの形で学習到達目標を設定し、子供の自己評価カードに反映させるなど、「英語を使って何ができるか」を意識した指導を一部小学校で試行した。 目標の設定にあたっては、小学校5・6年生で教科化した際のCAN-DOをどのように表記するか、更なる検討が必要である。CAN-DOは技能面の到達目標であり、評価と表裏一体のものであるから、小学校段階でどのように設定するか、慎重な検討が必要との議論が教員の間に生じた。特に、「読むこと」「書くこと」における設定の是非について検討が必要である。</p> <p>◎5～6年生における文字の扱いの工夫等 音声から文字への移行について、研究推進委員会等での協議で、大きく次の3点について意見が出された。</p> <p>①児童への過度な負担は避けるべきである。 ②「英語を読みたい・書いてみたい」という児童の興味関心、知的欲求を大切にしながら、発達段階に応じた活動を取り入れるべきである。 ③小学校段階で文字と綴りの関係を指導することで、中学校への接続がスムーズになるのではないかな。</p> <p>①について、H26年度は、授業の中で板書に英語の綴りを示すなど、「文字に触れる」機会を増やす取組を行った。示した板書について説明や読ませる活動は特に行わなかったが、児童は、「現在の活動で使われている表現だ」という認識から、板書を見ながら言い方を確認する姿も見られた。 ②、③について、小学校教員によるアルファベットのなぞり書きの指導、中学校教員が小学校の授業に参加してアルファベットの発音と単語の綴りの関係を指導するなど、いくつかの試みを行った。</p> <p>◎「教科型」の年間指導計画及び教材の作成 小学校高学年の教科化に向けて、年間の教材配列を中心とした指導計画を作成した。 教材については、文部科学省の補助教材を用いながら、CAN-DO リストに示した内容を基に、Hi, friends!の活動をふくらませたり、「紫波町を案内しよう」などオリジナル単元を今後、作成したりすることとした。 評価については、「文章による記述」を軸に協議した。教員の負担からくる実効性への疑問も示されたが、児童の学習意欲を育てていくといった視点から、「CAN-DO リスト」の形で示した学習到達目標の表記に基づき、児童が身</p>

	<p>に付けた力を文章記述するか、あるいは、リストのうち達成できたと認められる項目に○印等を記載するか、いずれかの方法で試行することとした。</p> <p>また、指導体制についての議論では、専科教員によらずに学級担任を中心とした指導とし、ALTとのTTによる指導体制を充実させる方向で進めることとした。学級担任だからこそできる指導として、他教科等とも関わりを持たせ、発達段階や児童の実態に応じて、児童が自ら学びたいという意欲を育てる活動を行い、コミュニケーション活動の充実を図ることとした。</p> <p>○諸調査結果の分析 【使用教材等】 ・3～6年 Hi, friends! を使用（一部、独自教材を含む）</p>
<p>第二年次 (H27)</p>	<p>【主な研究内容】（◎重点）※上記（3）②を参照 ○小学校3～4年における「活動型」の実践 ◎小学校5～6年における「教科型」の実践及び評価方法の研究 ◎「教科型」の年間指導計画及び単元・教材等の開発</p> <p>ア 「活動型」及び「教科型」の教育課程の編成実施 イ 小学校高学年の教科「英語」におけるカリキュラム開発及び指導方法の工夫 ウ 小学校高学年の教科「英語」における評価方法の工夫 エ 小学校教員を対象とした教科「英語」指導の研修実施</p> <p>○諸調査結果の分析 【使用教材等】 ・3～4年 Hi, friends! を使用（一部、独自教材を含む） ・5～6年 Hi, friends! 及び文部科学省作成教材を使用（一部、独自教材を含む）</p> <p>【進捗状況・課題】 ア 「活動型」及び「教科型」の教育課程の編成実施 ◇進捗状況 ・3・4年生「活動型」5・6年「教科型」で、どちらも週1時間、年間35時間実施している。指導は、HRT単独、HRTとNET（またはHRT）のTT。 ・「活動型」、「教科型」共に、学級単位で実施を基本とするが、ねらいによっては、学年合同や2学級合同でも実施している。 ・教育課程は、「活動型」も「教科型」も週1時間、年間35時間実施し、文部科学省作成の副教材“Hi, friends 1”（3・5年生）と“Hi, friends 2”（4・6年生）を主に使用し、“Hi, friends plus”は、5・6年生で用いて指導を行っている。 ・年度途中から、教育課程外（朝）の時間帯を活用し、15分間のモジュールを試行する学校も出た。教材はHi, friends Plusの他、市販のDVD教材を活用している。</p> <p>◆課題等 ・5・6年「教科型」を週1時間で実践したが、教科として文字の扱いに踏み込んだり評価の時間を確保しようとしたらすると、時間が足りない。教科として実践するには週2時間が必要であった。</p> <p>イ 小学校高学年の教科「英語」におけるカリキュラム開発及び指導方法の工夫 ◇進捗状況 ・高学年でも“Hi, Friends 1”と“Hi, Friends 2”を用いることで、中学年での学習内容をスパイラルに扱うこととした。 ・アルファベットの文字と音、綴りと音の関係、文構造の気付き等について、“Hi, friends Plus”の教材を用い、「読むこと」、「書くこと」の指導にも当たっている。</p>

- ・「活動型」のよさである、児童の思いを大切にしながら「書く」活動や「読む」活動を取り入れている。
- ・他教科や学校行事と関連付けた教材を作成し活用することで、子供の興味、関心をより高めることができた。
- ・授業の導入段階に絵本を活用することで、新出表現に対する子供たちの興味を引き出すことができた。
- ・単位時間の大きな流れを掲示することで、子供たちが授業の流れを確認することができるようにしている。
- ・単位時間の導入段階で、子供たち一人一人と既習表現を用いたやりとりを行うことで、子供の現段階でのつまずきを知ることができ、その後の指導の際の参考となった。
- ・多人数学級（40人学級）において、主にHRT2名、NET1名、計3名での形態で学習を進めることで、子供たちの活動を見とり、気付きを引き出したり、つまずきに気付いたりでき、その後の活動に見とりの結果を反映させることができた。1対1のコミュニケーション活動の例を子供たちに示すなどし、コミュニケーション活動が難しい児童への細やかな支援にも有効であった。

◆課題等

- ・中学年の教材としてHi, friends!はそのままでは活用が難しいため、エッセンスを生かしながら活動を工夫しているが、Hi, friends!に含まれるコミュニケーションの要素を残しながら中学年向けの教材を工夫する必要がある。
- ・Hi, friends! Plusの教材は、そこだけ授業の流れから切り離して扱うことが多く、コミュニケーションに向けた授業との関連付けが課題である。
- ・文部科学省の補助教材の他、町のALTが中心となって作成したワークシートや町独自の単元（紫波町の紹介）などの教材も作成中であるが、授業で活用する時間が確保できないため、実践を通じた検証が十分できない。
- ・小学校では、アルファベットなどの読む・書く活動を、これまでのコミュニケーション指向の活動にのせるのが難しい。特に、15分のモジュールにすると、スキルトレーニング中心になりがちである。
- ・5年生、6年生の教科指導の系統性をどのように創り上げていくのか、検討が必要である。
- ・特に「書くこと」の時間を授業の中で確保するのが難しい。

ウ 小学校高学年の教科「英語」における評価方法の工夫

◇進捗状況

- ・子供に授業の振り返りカードを持たせ、授業の最後に、言葉に対する「気付き」やコミュニケーションへの意欲、外国に対する興味・関心等について自己評価をさせている。また、授業での子供達の観察記録用の補助簿を作成している学校もある。
- ・単位時間の指導過程の中に、子供たち一人一人とやりとりする時間を設定したことで、既習の表現の定着状況を確認するよい機会となった。
- ・評価方法の工夫として、パフォーマンステストをどの学校も実践している。
- ・学校によっては、毎時間授業の最後に「読むこと」、「書くこと」のパフォーマンステストを行っている学校もある。
- ・通知票については、ABCによる評価と文章記述を併用し、学校において選択肢ながら実施している。評価材料は、振り返りカード、授業中の見取り、インタビューテストなどである。

◆課題等

- ・小学校教科英語では、児童の意欲につながるよう、「できた」という実感を持たせる評価を工夫したいと考えるが、CAN-DOに対応した評価で、中高と同じく「できたーできない」のイメージが先行しがちである。
- ・パフォーマンス評価を実施するには、時間の確保が課題である。
- ・評価について、各小学校それぞれの取組を基に、同一の評価方法を検討する。
- ・パフォーマンステストの実践を重ね、よりよい方法（場面、形態、A,B段階の基準、学習意欲を向上させる手立て）を検討する。
- ・個々の評価方法について、子供の受け止めがどうであったかを基に、評価の在り方を検討する必要がある。

		<p>エ 小学校教員を対象とした教科「英語」指導の研修実施</p> <p>◇進捗状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指定校教員を対象に、「教科英語の考え方」「音声と文字の関係」について研修を実施した。 ・各校において、外国語活動（英語科）を研究テーマに掲げ、計画的に授業研究会を行い、指導の在り方についての実践研究に取り組んでいる。（全校で取り組む学校1校、外国語部会を中心に取り組む学校2校） <p>◆課題等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校は、本県では学級担任による指導を中心に考えているので、小学校教員への研修（免許法認定講習）の在り方を検討する必要がある。一方、専科教員や中学校教員の小学校兼任についても、検討が必要である。 ・研究指定地域においては、町でALTを十分確保しているが、県内の状況は様々であり、今後いかに確保を進めていくかが課題である。 ・小学校においては、教員による指導力の差に課題が見られる。研究指定校であっても、部会の所属によって、理解に差がある。教員研修の機会も十分確保できていない。 ・ALTについても、研修によって指導力の向上が必要である。（研修の機会が少ない）
	<p>第三年次 (H28)</p>	<p>【主な研究内容】（◎重点）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○小学校3～4年における「活動型」の実践 ◎小学校5～6年における「教科型」の実践（時数増） ○「教科型」の年間指導計画及び教材の再検討 ○諸調査結果の分析 <p>【使用教材等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3～4年 Hi, friends! を使用（一部、独自教材を含む） ・5～6年 Hi, friends! 及び文部科学省作成教材を使用（一部、独自教材を含む）
	<p>第四年次 (H29)</p>	<p>【主な研究内容】（◎重点）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○小学校3～4年における「活動型」の実践 ○小学校5～6年における「教科型」の実践（時数増） ◎諸調査結果の分析及び研究のまとめ <p>【使用教材等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3～4年 Hi, friends! を使用（一部、独自教材を含む） ・5～6年 Hi, friends! 及び文部科学省作成教材を使用（一部、独自教材を含む）
<p>中学校</p>	<p>第一年次 (H26)</p>	<p>【主な研究内容】（◎重点）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○小学校「活動型」指導内容の実態把握 ◎「活動型」を踏まえた中学校指導方法の工夫改善 第一年次の研究においては、小学校の指導内容を知ることが中心で、中学校において、小学校外国語活動の成果を十分生かした指導を展開するには至らなかった。今後、中学校の指導改善に一層力を入れていく必要がある。 <ul style="list-style-type: none"> ◎小学校「教科型」指導の教育課程づくりへの参画 ○諸調査結果の分析 <p>【使用教材】検定教科書及び一部独自教材（第一年次から第四年次まで共通）</p>
	<p>第二年次 (H27)</p>	<p>【主な研究内容】（◎重点）※上記(3)②を参照</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎「活動型」を踏まえた中学校指導方法の工夫改善 ◎小学校「教科型」指導を踏まえた中学校の指導目標及び指導方法の検討 オ 小学校の指導を活かした中学校における指導の充実 カ 小中高の一貫した到達目標の見直しと指導内容の改善 ○小学校「教科型」指導の実態把握 ○小学校「教科型」指導の教育課程の再検討への参画 ○諸調査結果の分析

		<p>【進捗状況・課題】 オ 小学校の指導を活かした中学校における指導の充実 ◇進捗状況 ・導入時に小学校で行われてきたコミュニケーション活動を取り入れることで、これまでの学習を想起させ、生徒のステップアップへの意欲づけにつなげている。 ・1年生の4、5月にアルファベットの大・小文字の定着、音と文字との関係を正しくつかんで英語を正しく書いたり、読んだりできるようアルファベットカードを活用した。アルファベット順に並べたり、音をヒントに簡単な単語を並べたりするゲームを行った。また、6月以降は教科書付録のアクションカードを使って、ゲームをしながら動詞句の定着や文型練習などを行っている。 ・音に慣れ親しんできた生徒達に、音と文字の関連を身につけさせるため、NET とティームティーチング授業のウォームアップとして音の確認や単語の発音、音の聞き分けクイズなどを行っている。 ・小学校と中学校を兼務する NET が、小中連携についてアドバイスを行っている。</p> <p>◆課題等 ・Hi, Friends と中学校教科書の各学年における指導事項の関連性を明らかにし、指導計画・展開に生かす必要がある。 ・小学校の Classroom English を発展させた、英語で行う授業の実践を充実させる。 ・小学校の指導を生かす場面の多くが、1年生の授業ということもあり、2、3年生の担当教員との意見交流や共通認識が不足しがちである。 ・小中の接続を意識した中学校の授業を検討しているが、小学校教科英語を経験した中学生の指導はこれからであり、実践的な研究にならない難しさがある。</p> <p>カ 小中高の一貫した到達目標の見直しと指導内容の改善 ◇進捗状況 ・他地区の研究実践資料などを参考にしながら、Hi, Friends! と中学校教科書との対応表を作成した。</p> <p>◆課題等 ・小学校、高校との CAN-DO リスト、年間指導計画の系統化。</p>
	<p>第三年次 (H28)</p>	<p>【主な研究内容】 (◎重点) ◎「活動型」を踏まえた中学校指導方法の工夫改善 ○小学校「教科型」指導の教育課程の再検討への参画 ◎小学校「教科型」指導を踏まえた中学校の指導実践及び教材開発 ◎実践結果を踏まえた指導目標及び指導方法の再検討 ○諸調査結果の分析</p>
	<p>第四年次 (H29)</p>	<p>【主な研究内容】 (◎重点) ◎小学校「教科型」指導を踏まえた中学校の指導実践及び教材開発 ◎諸調査結果の分析及び研究のまとめ</p>
<p>高等学校</p>	<p>第一年次 (H26)</p>	<p>【主な研究内容】 (◎重点) ◎小学校及び中学校における指導の実態把握 ◎小中高を通じた英語教育の在り方に関する検討 小中高の学習到達目標を並べて検討した。中学・高校においては、今後、小学校で教科として学んだ子供が入学してくることを想定しながら目標及び内容を再検討したが、「想定」を基に検討を進めることに困難さを感じた。特に高校については、実際に入学する生徒は地域の中学校とは限らないため、今後の生徒の状況を想定することが一層難しかった。まずは、現在の生徒の実情を踏まえ、どのように伸ばすかという視点で検討を行った。</p> <p>◎高等学校における指導と評価の充実と高度化した言語活動の試行 高等学校の授業参観等を通して、小学校、中学校の学習指導要領や教科書</p>

	<p>を十分に研究する必要があることが明らかとなった。また、指定校の生徒の実情を踏まえるとともに、小学校、中学校の指導方法や指導内容を取り入れた、生徒の活動を中心とした指導を展開する必要があることについて確認した。</p> <p>○諸調査結果の分析 【使用教材】検定教科書及び一部独自教材（第一年次から第四年次まで共通）</p>
<p>第二年次 (H27)</p>	<p>【主な研究内容】（◎重点）※上記（3）②を参照 ◎中学校の指導目標及び指導方法の検討への参画 ◎高等学校における指導目標の吟味と高度化した言語活動の試行 オ 小学校、中学校の指導を活かした高等学校における指導の充実 カ 小中高の一貫した到達目標の見直しと指導内容の改善 ○小学校及び中学校における指導の実態把握 ○諸調査結果の分析</p> <p>【進捗状況・課題】 オ 小学校、中学校の指導を活かした高等学校における指導の充実 ◇進捗状況 ・小中学校でのペアやグループによる言語活動を参考に、英語でのやりとりが活発な活動に取り組みせるような授業プラン作りに取り組んでいる。 ・これまで以上に音声やフォニックスを意識して指導することにより、英語を発音することに抵抗がなくなった生徒が増えた。また、自分の力で発音しようとする生徒も増えた。 ◆課題等 ・授業を英語使用のリアルな場にするには難しい（「伝えたいことがない」生徒が多い）。生徒のモチベーションの持続。</p> <p>カ 小中高の一貫した到達目標の見直しと指導内容の改善 ◇進捗状況 ・小中学校の CAN-DO List を踏まえて、指導と評価を繰り返しながら、生徒の実態に合ったものを作成する。 ・パフォーマンステストの比重を大きくしたことによって、英語が苦手な生徒の意欲を引き出すことができた。 ◆課題等 ・生徒の力のばらつきが大きく、CAN-DO List の作成には工夫が必要。「最低限これだけは」という目標を課す必要があるが、ややもすればこの目標が中学校と変わらない。</p>
<p>第三年次 (H28)</p>	<p>【主な研究内容】（◎重点） ◎実践結果を踏まえた中学校の指導目標及び指導方法の再検討への参画 ◎高等学校における指導目標の再吟味と発表や討論などの言語活動の実践 ○諸調査結果の分析</p>
<p>第四年次 (H29)</p>	<p>【主な研究内容】（◎重点） ○中学校の指導実践及び教材開発等に関する研究への参画 ◎高等学校における発表や討論などの言語活動の実践及び評価の工夫 ◎諸調査結果の分析及び研究のまとめ</p>

(6) 評価計画

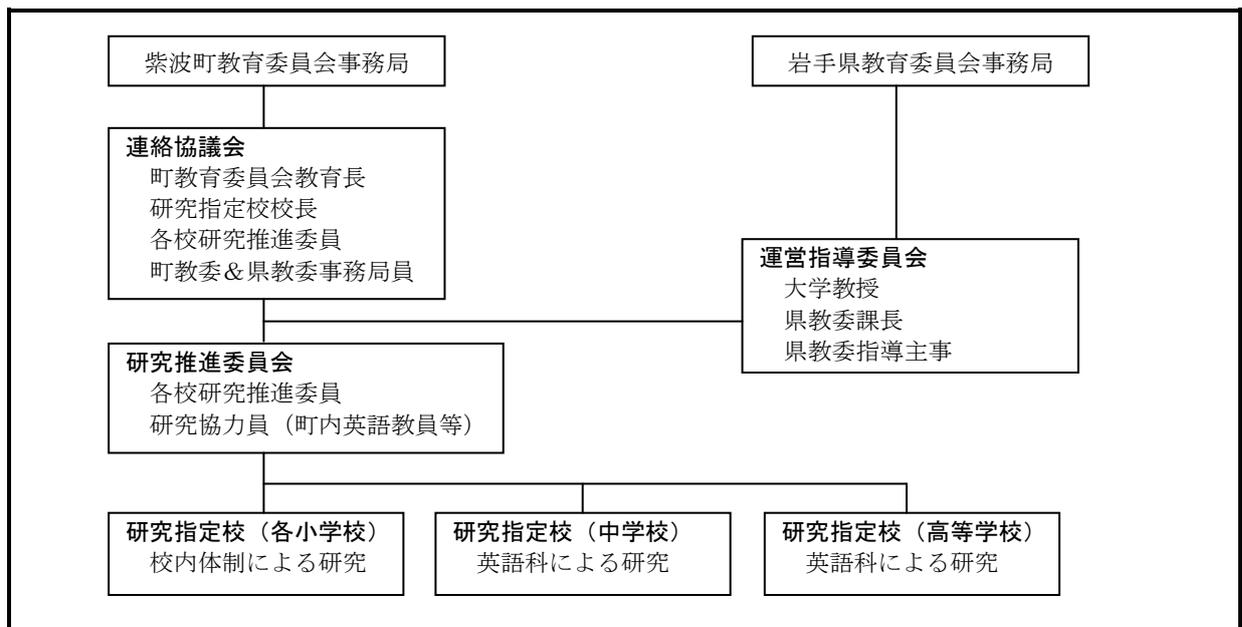
		小学校	中学校	高等学校
第一年次 (H26)		○アンケート調査 ・ 3～6年 (12月) ◆児童英検 ・ 4～6年 (12月)	○アンケート調査 ・ 1～3年 (12月) ○英語チャレンジテスト ・ 3年 (10月)	○アンケート調査 ・ 1～2年 (12月) ○基礎力確認調査 ・ 1～2年 (4月)
第二年次 (H27)	計画	○アンケート調査 ・ 3～6年 (12月) ◆英検 Jr. ・ 4～6年 (12月)	○アンケート調査 ・ 1～3年 (12月) ○英語チャレンジテスト ・ 3年 (10月) ◆英研 I B A ・ 2年 (10月)	○アンケート調査 ・ 1～2年 (12月) ○基礎力確認調査 ・ 1～2年 (4月) (◆外部試験実施を検討)
	進捗状況	○アンケート調査 ・ 3～6年 (12月) ◆英検 Jr. ・ 4～6年 (12月)	○アンケート調査 ・ 1～3年 (12月) ○英語チャレンジテスト ・ 3年 (10月) ◆英研 I B A ・ 2年 (10月)	○アンケート調査 ・ 1～2年 (12月) ○基礎力確認調査 ・ 1～2年 (4月)
第三年次 (H28)		○アンケート調査 ・ 3～6年 (12月) ◆英検 Jr. ・ 4～6年 (12月)	○アンケート調査 ・ 1～3年 (12月) ○英語チャレンジテスト ・ 3年 (10月) ◆英研 I B A ・ 2年 (10月)	○アンケート調査 ・ 1～2年 (12月) ○基礎力確認調査 ・ 1～2年 (4月) (◆外部試験実施を検討)
第四年次 (H29)		○アンケート調査 ・ 3～6年 (12月) ◆英検 Jr. ・ 4～6年 (12月)	○アンケート調査 ・ 1～3年 (12月) ○英語チャレンジテスト ・ 3年 (10月) ◆英研 I B A ・ 2年 (10月)	○アンケート調査 ・ 1～2年 (12月) ○基礎力確認調査 ・ 1～2年 (4月) (◆外部試験実施を検討)

※○は県で実施する調査、◆は外部団体の試験である。

上記の他に、中学校、高等学校及び「教科型」を実施した小学校の学年で、パフォーマンス評価を実施。

4. 研究組織

(1) 研究組織の概要



- ・岩手県教育委員会は、本研究の全体的な推進をつかさどり、紫波町教育委員会と連携して研究推進の管理に当たるとともに、運営指導委員会を組織し、研究計画及び研究内容に関する指導助言、研究成果検証のための調査の実施と事業内容改善のための助言を行う。また、本研究の成果を県

内に普及するため、拠点地域の学校を会場とした研修会などの取組を行う。

- ・紫波町教育委員会は、本研究推進に係る連絡・調整を行うため、連絡協議会を組織して研究推進計画を検討するとともに、各指定校の研究推進委員及び協力員からなる研究推進委員会を組織し、具体的な研究内容の検討、授業研究会の運営などに当たる。

(2) 運営指導委員会

①活動計画

【活動計画】

年間を通して、主に次の3点について活動する。

- 研究計画及び研究内容全体に関する指導助言
 - ・指定校及び指定地域の取組内容に対して、委員の訪問により直接指導を行うほか、メール等により指導助言を行う。
- 年間4回の運営指導委員会の実施
 - ・指定校の授業研究会に参加し、直接指導助言を行う。
 - ・指定地域の教員に対して、運営指導委員を講師にした研修を実施する。
- 研究成果検証のための調査の実施と事業内容改善のための助言
 - ・アンケート調査や英語力に関する外部試験等を指定校の対象児童生徒に対し実施する。
 - ・調査結果及びその分析を基に、研究及び事業内容の評価と改善のための助言を行う。

【進捗状況・課題】

◇進捗状況

- ・ほぼ、計画通りに実施することができている。
- ・指定校の授業研究会は、県内の教員にも公開しており、教科英語の研修機会となっている。
- ・研究推進委員会を増員し、校内での研究推進体制の強化にもつながった。
- ・実地調査を含め、様々な授業提案や助言をいただく機会が研究推進に役立っている。
- ・アンケート調査や英語力に関する外部試験等を指定校の対象児童生徒に対し実施する。

◆課題等

- ・中学校・高校における指導目標や指導方法等の検討は昨年度より進んでいるものの、まだ十分とは言えない。特に、中学校の指導をどのように改善していくかが研究の鍵であると考えている。
- ・調査結果の分析がまだである。これから吟味する必要がある。

5. 年間事業計画

月	強化地域拠点の取組	運営指導委員会
4月	<ul style="list-style-type: none"> 研究計画立案、各校研究体制の整備 基礎力確認調査（高1、高2） 	
5月	<ul style="list-style-type: none"> ◆第1回連絡協議会（5/12） 事業計画の確認、研究計画の協議 <p style="text-align: center;">○研究推進委員会（随時）</p>	<ul style="list-style-type: none"> 研究計画への助言
6月	<ul style="list-style-type: none"> ☆紫波町小中学校英語研修会（6/12） ☆授業研究会（6/10） ★授業研究会（6/26）紫波一中・赤石小 ★実地調査（6/29）日詰小・紫波総合高 	<ul style="list-style-type: none"> 指定校訪問 ■第1回運営指導委員会
7月		
8月		
9月	<ul style="list-style-type: none"> ★授業研究会（9/3）紫波三中・日詰小 	<ul style="list-style-type: none"> ■第2回運営指導委員会
10月	<ul style="list-style-type: none"> 英語チャレンジテスト（中3） 英検 I B A（中2） 	<ul style="list-style-type: none"> 指定校訪問
11月	<ul style="list-style-type: none"> ☆授業研究会（11/13）紫波二中 ☆赤石小学校公開研究会（11/20） 	<ul style="list-style-type: none"> アンケート調査の作成
12月	<ul style="list-style-type: none"> ★先進校視察（12/2-3） <ul style="list-style-type: none"> 春日部市立粕壁小学校、春日部中学校 宮城教育大学附属小学校、附属中学校 ★授業研究会（12/11）古館小 <ul style="list-style-type: none"> 児童英検（小4～小6） アンケート調査（小3～高2） 	<ul style="list-style-type: none"> ■第3回運営指導委員会
1月	<ul style="list-style-type: none"> 調査結果の分析 成果発表（町教育研究所発表会） 	<ul style="list-style-type: none"> 調査結果の分析
2月	<ul style="list-style-type: none"> ◆第2回連絡協議会（2/16） 研究報告書の作成 成果発表（県教育研究発表会） 	<ul style="list-style-type: none"> ■第4回運営指導委員会 報告書の内容の吟味 次年度研究に向けた助言
3月	<ul style="list-style-type: none"> ○研究推進委員会 次年度の研究計画の作成 	
【その他の取組】 <ul style="list-style-type: none"> 先進校視察、全国連絡協議会への参加等 		